【保坂さんへの質問】…質問は順不同です

・自分には書きたいテーマや物語があるわけではなく、まず、どうしても書きたいイメージがあります。というかイメージしかない。それを小説にする方法をずっと考え続けてきたし、書き続けてきた。とにかく「このイメージを小説にするんだ」とやっているが、わからないことだらけです。イメージを書く、断片を書く、それを小説として書く……ということの可能性についてお聞きしたいです。これは小説になるのか？という問いでもあるかもしれません。

・質問と言うよりリクエストですが、『読書実録』の＜スラム編＞で書かれていることについて、改めて話を聞きたいです。

（以下引用：P56～）

スラムはスラムに暮らす人が内側からスラムについて語った言葉がない、どの言葉もスラムに生きていない人が外側からの論理や価値観や美意識で語ったものばかりだ、かつてスラムに暮らしたという人は今はもうスラムに戻ろうと思ってはいないのだから、やっぱりスラムの外からの視点でしかない、スラムは内側から語られることはおそらく決してない。

［略］

　内側から語る言葉、過去形としてでなく現在そのものとして語る言葉、そういう言葉を持たないということでは、小説家も演奏家も画家もダンサーもみんなそうだ――ということを、スラムを考えるようになってからますます考えるようになったんです。

［略］

　スラムは、貧困であり、非衛生であり、無秩序であり、人々は無計画であり、暴力が日常的であり、さまざまな原因によって短命であり……と規定するのは政治や社会の立場だ。スラムに暮らす人たちの内面がスラムの外の言葉では語れないものだとしたらどうか？

［あとは最後まで全文必要］

引用した↑だけでなく、この章に書かれていることすべてが、今の自分にとって何かのヒントになるという直感があります。以前も話されたかもしれませんが、この機会に、直接お話しされているところを聞いて、見て、いろいろ考えたいです。

・自分の目標のひとつに、どこまで正直にやりきれるか、正直さを保てるかがあります。でも、そのことによって心が壊れそうになるときもある。めげずにいられる秘訣のようなものはあるでしょうか。作家像は、一度つかんでもくじけそうになるときがある。ときには忘れてしまうこともあります……おそろしいことです。

・『野球短歌』は下心や狙いや計算がなくて、勝手に出てきたようなところもあり、その計算のなさを保ったまま、小説とも向き合いたいと考えています。しかしこれが結構むずかしく、自分は今後どうしたらいいのだろうと立ち止まってしまっている。書くことでしか答えは見つからないとわかってはいるのですが、それでも何か話を聞きたいです。

＜以下、ちょっと毛色の違う質問＞

・小説でも短歌でも、書かれたものを整えることで失われるものがある気がしています。ただ、公募的にはどうなんだろうと思ってしまうところもあり、保坂さんの考えを聞きたいです。

・小説を書くとき（とくに公募において）、読者はだれなのかをどこまで考えるべきなのか